

県立特別
支援学校

小学校

教職員・保育士

中学校

保育所

県立高等学校

幼稚園

益田市



通学路に花を植える小学生

子どもの手本となるよう意識して行動するようになった。

全職員が共通の意識(言葉遣い、対応の仕方など)を持つことで、取り組みの成果が上がっている。

学校行事の起案には「ふるまい向上の視点」を明記するなどして、「ふるまい」を育てる意識が高まった。

挨拶を心がけたことでコミュニケーションがとりやすくなった。

丁寧な言葉遣い、ゆとりを持つようにした。(子どもだけでなく、保護者・地域へも)

研修などを通して、保育を振り返る良い機会となった。当たり前のことを大切に。



職員間のあいさつや情報共有で、連携がよくなり、子どもや保護者への対応がよくなった。

「ふるまい」という言葉がごく自然に職場で使われるようになった。

傾聴の姿勢を大切にするようになった。

異校種の職員交流で、情報共有、相互理解ができ、同じ目線、同じ指導方針で、子どもの指導に当たることができるようになった。

研修や、確認の話し合いにより、接遇がよくなってきた。

家庭の協力を本物にする必要がある。価値観の多様化は感じる。

始めたころからみると児童の基本的な生活習慣は向上しているが、浮き沈みを繰り返し徐々に上向いてきたものである。手を抜くとすぐ悪化する。

仕事の手を止め、生徒の目を見て対応することを心がけるようになった。

身なりに気を配る教職員が増えた。

子どもたちの変化を敏感に感じるようになった。児童理解をするうえで効果があった。

教職員の重点行動化の取組で、生徒への声かけが以前より温かく、思いやりのあるものになってきた。

月ごとの教職員の生活目標を職員室に掲示し、ふるまい向上に努めた。

高等学校における道徳教育の実践に向けての意識づけになった。

職員が生徒にあいさつの声かけをすることで、生徒と職員のコミュニケーションが密接となり、さまざまな指導がスムーズにできるようになった。

子どもたちに接していくのに、ふるまい向上の意識を持つ、共通理解をする、ということはやはり大切なことなのです。また、「指導するにあたって、自分たちを振り返った」という回答も多くありました。特別なことではなく、日常の取組の中で大切にしていこうという考えが、広まっています。